



小児科医師のお話

お母さん、お父さん、もうすぐ赤ちゃんの誕生ですね。

喜びと期待でいっぱいのことと思います。ここでは、赤ちゃんについて知っておいて欲しいことについて述べさせていただきます。



1. 新生児期とは

妊娠・分娩の影響が消失し、子宮内生活から子宮外生活への生理的適応がほぼ完了するまでの期間を新生児期と言い、一般的には WHO が定義した、生後 28 日未満の乳児を新生児と呼びます。特に生後 1 週間以内を早期新生児と呼びます。



2. 新生児期の問題点

お産は安全で、赤ちゃんは元気に生まれてくると誰もが信じていると思います。しかし、新生児は約 10 ヶ月もの間、胎内で暖かく、静かで居心地の良い母体に依存していた環境から、子宮外へと身体において人生で一番ダイナミックな変化が起きます。出生後、環境の変化に適応していく過程で種々の障害や、先天性疾患など、その原因を問わず、症状の発現から進行まで大人とは異なり、急激なこともあります。



呼吸

子宮外に出て啼泣することにより、初めて水浸しの肺が空気に置き換わります。帝王切開や第一啼泣が遅れると、多呼吸、陥没呼吸を認めることがあります。

循環

お母さんに依存していた循環が、子宮外で独立した環境になります。生後数日で胎児環境が新生児循環に移行します。そのころに心雑音、チアノーゼが出現し、先天性心疾患が発見されることがあります。

体温

赤ちゃんは体温調節が未熟で、外気温に容易に左右されます。児が母体より娩出されると胎内の 37 度の温暖な環境から急速に寒冷な環境にさらされます。体温が低下すると循環・呼吸が悪くなり、悪循環のサイクルに入ります。そのため、赤ちゃんの保温には配慮が必要です。冷たい手で触ることや、風の当たる場所に赤ちゃんを寝かせておくのは避けてください。



消化

赤ちゃんは生後初めて哺乳を開始します。哺乳、嚥下、消化と呼吸の協調運動の調和により確立します。新生児の胃の容量は50mlで、授乳開始とともに増加していきます。胃の入口がゆるく、縦型で飲み込んだ空気をげっぷとして出しやすい構造になっています。同時に飲み込んだミルクも吐きやすく、げっぷが不十分な場合やミルクを飲みすぎたあとには多量に吐いたりすることもあります。しかし、元気良く泣いて、体重増加に問題なければ様子を見ましょう。しかし、出生早期は脱水を起こす場合があるので点滴等の処置が必要な場合があります。



黄疸

代謝機能が未熟なためビリルビンを上手く排泄できない場合は高ビリルビン血症＝黄疸を認めることがあります。大部分の新生児は生後2～3日に出現し、生後2週間までには消退します。

生後24時間以内に出現するものや（早発黄疸）、生後2週間以上続くもの（遷延性黄疸）は脳に影響を及ぼすリスクとなるため注意が必要です。母乳栄養児では生後1ヶ月でも黄疸が残っていることもありますが母乳を中止する必要はほとんどなく、自然に軽快します。

しかし、閉塞性黄疸の場合もあり、便の色を確認し、灰白色やクリーム色の場合は早期に医療機関の受診が必要です。



感染

赤ちゃんは免疫力が未熟なため、感染予防が必要です。赤ちゃんを触る時にはしっかり手洗いをし、乳首のケアに注意してください。また、当院では感染予防のために赤ちゃん毎に一人一つのベッドを使用しています。

以上のような症状がないことを確認し、赤ちゃんが子宮外の環境に充分適応でき、小児科医師の許可を得て退院が決まります。



3. 先天性代謝異常スクリーニング

生後4日目に赤ちゃんより少量の血液を採取し、ご家族の同意のもと検査を施行します。早期発見治療することにより、赤ちゃんの生命予後だけでなく、後遺症を抑えることができます。



4. 予防接種・健診

出生後は育児に追われなかなか親子健康手帳を見る機会がないと思います。今のうちにしっかり親子健康手帳を読んでください。

生後2ヶ月より予防接種が開始します。予防できる病気にかからないようにしてあげましょう。

当院では、アレルギーや痙攣等の基礎疾患をもつ児を対象に予防接種外来をしているため、健康な赤ちゃんは基本的にはかかりつけ医でお願いすることになります。



5. 血液型

当院では、臍帯血による赤ちゃんの血液型採血は行っていません。赤ちゃんからの血液型採血も行っていません。

生まれて6ヶ月頃までは、まれに血液型が変わる可能性があるからです。

上記以外に妊娠中、分娩後心配なことは相談してください。場合によっては、個別相談を行うことができるので、小児科外来へお尋ねください。また希望があれば保健師による電話相談、訪問看護を受けることができます。

赤ちゃんやご家族の皆様が安心して育児ができる環境を提供できるよう、スタッフ一同協力させていただきます。助産師、産科医師、小児科医師、誰でも遠慮なく相談してください。

